

井上靖

後白河院
額田女王

額田女王 後白河院

井上靖

新潮社版

額田女王・後白河院

〈井上靖小説全集29〉



昭和50年3月20日発行

昭和52年7月10日3刷

定価 950円

© Yasushi Inoue, 1975,
Printed in Japan.

著者 井上靖

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一
話・業務部(〇三)二六六一
五一―、編集部(〇三)二六
六一五四― 郵便番号・一
六二 振替・東京四一八〇八

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、御面倒で
すが小社通信係宛送付
下さい。送料小社負担に
てお取替えます。

目次

額田女王

五

後白河院

三〇四

註解

四〇八

自作解題

四二

装
画
加
山
又
造

井上靖小説全集 第29卷

額田女王

白い雉きじ

一

大化六年（西暦六五〇年）二月、穴戸あなと（のちの長門・山口県）の国司が朝廷に白い雉を献上して来た。去る正月九日に穴戸の麻山あさというところで捉えたが、余り珍しいので献上に及んだということであった。朝廷では、この白い雉の出現がいかなることを意味するか、この方面のことに明るい者たちに訊いてみることにした。半島の百濟国はくせいこくから質ひやくしちとしてこの国に来ている王子豊璋ほうしやうは、

「調べてみましたところ、後漢の明帝の永平十一年に、白い雉がところどころに居たという記述がございます」と答えた。それ以外のことと言わなかった。これでは瑞

祥しやうであるか、その反対であるか判らなかったが、平生でも余分なことはいっさい口にしない豊璋らしい用心深さであった。豊璋は質としてすでにこの国で、十数年の歳月を送っていた。

代わって下問を受けた僧侶たちは、相談した上で答えた。

「白い雉などというものは、未だ見たことも、聞いたこともございません。天下の罪人たちを赦して、民の心を悦ばすべきでございますう」

これも、満足できる答ではなかった。瑞祥なら罪人を赦してもよかったが、そうでなかったら却って禍を招くものになるであろうと思われた。

そこで、朝廷では十師の一人として、高僧の誉れ高い道登どうとうに訊ねた。道登は高句麗に留学し、帰国後元興寺に住している朝廷の信任厚い僧侶である。

「昔、高句麗では伽藍を造る場合、必ず瑞祥ある地を選んでおります。たとえば白い鹿が歩いているのを見て、そこに寺を造り、白鹿蘭寺と名付けております。また白い雀が寺の耕作地に姿を見せまると、国人は吉祥だとしております。また唐土に遣わされた使者が、三つの足指を持った鳥を持ち帰ったことがあります。これをも瑞祥であるとしました。まして、この度は白い雉の出現でございます。どうして瑞祥でないことがございましょう」

次に國博士の僧旻の意見を訊いた。大化の改新以後、高向史玄理と並んで最高の知識人と目されている人物である。

「このたびのことはまことに吉祥であつて、めつたにあることではございません。王者が天下にあまねく恩沢を施す時、白い雉が現れるということを聞いております。また、王者の祭祀が正しく行われ、國に食も衣も満ち足りている時、白い雉が現れるとも聞きます。また王者の恵みが聖人の道に適う時、現れるとも聞きます」

僧旻はそれでも足りなく、周の成王の時*の故事や、晋の武帝の時*のそれを引いて、詳しく説明し、

「これは吉祥でございます。天下の罪人を赦すべきでありますしう」

と奏した。そこで朝廷では直ちに白い雉を皇城の國に放し、白雉と改元、大赦を行うことに決定、その發表を二月十五日に百官参列のもとに、正月元日の儀式同様に執り行うことにした。

時代は、皇極四年（六四五年）の政変より五年経つていた。中大兄皇子が中臣鎌足と謀つて、専横眼に余るものあつた蘇我入鹿を大極殿に斬つたのはついこの間のことのようには思われるが、いつかその時から五年の歳月が過ぎ去っている。

入鹿の父蝦夷が自殺したのは、入鹿が誅された翌日のことであつて、権勢ならびなかつた蘇我氏一族は蝦夷の死に依つて、ここに全く亡んだと言つてよかつた。僅か二日にわたつての出来事であつた。

政変後直ちに皇族中の長老の一人である輕皇子が即位した。孝徳天皇である。皇極天皇は政変第一の殊勲者である。中大兄皇子に位を譲ろうとしたが、中大兄は鎌足と謀つて、自らは皇太子の地位に就き、輕皇子を推したのであつた。中大兄皇子が政治の改革に自由に腕を揮うために皇太子の地位を選んだことは、誰の眼にも明らかであつた。そして新たに左大臣に阿倍臣倉梯麻呂、右大臣に蘇我倉山田石川麻呂が任命され、中臣鎌足は内臣、僧旻と高向史玄理とが國博士に収まつた。そしてこの新政府の首脳部の手で、いわゆる大化の改新の新しい法令や制度は次々に打ち出されて行つたのである。

政変より今日までの五年間、時代は大きく揺れ動いてゐた。一つの新しい法令が出る度に、國中が大きく揺れた。中央の有力な豪族たちも揺れれば、地方の族長、百姓たちも揺れた。中央の豪族の一族の中で國司に任命された者は、続々と地方にくだつて行つた。國司に任せられることが、自分たちにとって有利なことであるか、その反対であるか、誰にも見当が付かなかつた。地方に派せられた役人は役人

で、耕地の面積を調査したり、戸籍を造ったりすることに忙しかった。このことがいかなることを意味し、いかなる結果を以て現れるかは、当の役人にも、地方の族長たちにも、百姓たちにも見当が付かなかった。何か知らないが、時代は大きく変わろうとしており、そのために、自分たちが命じられたことをやらなければならぬ立場に立っていることだけが判った。いい時代が来ると考えている者もあれば、悪い時代が来ると考えている者もあった。

こうしたことは仏教の社会においても同様であった。僧侶を統制するために十師が任命され、寺院を統制するために寺司、寺主、法頭といったものが任命された。一体、どのような時代が来るであろうかということは、僧侶たちにも判らなかつた。皇族、豪族たちはこれまで葬式にあたって墳丘や大石室を営んだが、そうした盛大な葬儀の風習は禁ぜられた。殉死や祓除も禁ぜられた。殉死や祓除が禁ぜられるのはいいとして、葬儀の営み方にまで干渉するのは行き過ぎではないかというのが、一般の人たちの考え方であつた。墓にも六つの等級ができた。

墓にも等級がつけられるくらいだから、冠位の制も十九階に改められた。役人たちはみな指定された布や色でできた新しい冠を用いなければならなかつた。階級がたくさんできて、身分の上下がいやにはつきりした。

こうして時代が急速に変わりつつある中に、幾つかの大きい事件があつた。一つは政変のあつた大化元年の末に、都が飛鳥から難波に移つたことである。政変で世の中がひっくり返っている最中に遷都が行われたのであるが、これに対する批判は到るところで、当然なこととして行われた。何も、この際宮殿も営まれていない難波に引き移る必要はないではないかという声が一般のものであつた。中大兄皇子と鎌足は新しい政治は新しい都で行われねばならぬと考え、人心を一新するための強行措置であつたが、この遷都に附随して起こる混乱は相当大きいものであつた。

それからこの遷都騒ぎの起こる前に、謀反の企てがあるということ、政変後皇太子の地位を退いて、吉野にはいつていた古人大兄皇子が斬られた。中大兄皇子の異母兄に当たる方である。この事件はいろいろと取沙汰された。古人大兄皇子が蘇我氏の残党にそそのかされたのだと言う者もあれば、いや新政府のやり方を快しとしない者たちにかつがれたのだと言う者もあった。また一部には、古人大兄皇子は何の罪なくして葬り去られたのだという風説も流れた。

が、この古人大兄皇子の事件は、やがて次にやって来た難波への遷都騒ぎでどこかへ行ってしまった。古人大兄皇子の事件は、多くの役人たちにとっては何の関係もない遠

いところの出来事であったが、遷都の方は直接自分たちに
関係を持っていた。住み慣れた家を処分し、新しい都に引
き移って行かなければならなかった。

それから第三の大きい出来事は、新都難波において政府
首脳部内に起こった事件であった。難波に都を遷してから
三年、漸く難波が都としての体制を持ち始めた大化五年
(六四九年)に起こった事件であった。この年の三月に阿
倍左大臣倉梯麻呂が病歿したが、それから間もなく、右大
臣石川麻呂の身辺にただならぬ暗い影が漂い始めた。石川
麻呂が中大兄皇子を暗殺しようと計画しているという密告
者があったからである。密告者は石川麻呂の弟の蘇我日向
であった。

石川麻呂は危害が身に及ぶことを感じると、難波を出て、
長男の興志が居る飛鳥の山田寺に入った。そして翌日、討
手の軍の到着する前に妻子八人の者と自刃して相果てた。
この事件は、一族の者二十三人が殺され、十五人が流刑に
処せられて落着した。

かくして難波朝廷は左右大臣を相次いで失い、それに代
わって、巨勢臣徳太が左大臣に、大伴連長徳が右大臣に任
命された。

石川麻呂の事件は、世間に大きい衝撃を与えた。倉梯麻
呂の方は明らかに病死であったので問題はない筈だったが、

続いて石川麻呂の事件が起こったので、その間に何らかの
関連があるように噂する者もあった。また二人の死の間には
関連はないが、倉梯麻呂の死に依って左大臣に空席がで
きたので、序でのごとに右大臣の方も空席にしてしまう方
が、万事につけて都合がよかったのだと、陰にこもった言
い方をする者もあった。また、いや、そうではない。倉梯
麻呂、石川麻呂共に、新政府に対して反感を持っていた。
その証拠には二人とも新冠を冠するのを潔しとしないで、
古冠を冠っていたではないか。いつか新政府に対して弓を
引こうという考えは二人共通のものであったのだ。そうし
たことは誰にも判っていたが、中大兄皇子も鎌足もうっか
り手をくだすことはできなかったのである。それが倉梯麻
呂の突然の死に依って、事情は一変し、忽ちにして石川麻
呂は葬り去られるに到ったのである。こういう説をなす者
もあった。

併し、実際のところ、この事件の真相は誰にも判らなかつた。
倉梯麻呂と石川麻呂の二人が朝廷において古冠に執
して新冠を冠らなかつたことは事実であった。大化の改新
に依って、左右大臣の地位は下がり、大幅にそれが持つ権
限は削りとられていたので、そうしたところにおいて、二人
が新政府のやり方に対して釈然としないところがあったと
しても不思議はなかった。

それからまた、中大兄皇子の妃蘇我造媛は石川麻呂の女である。中大兄にとつては、石川麻呂は妃の父親である。

こうした点から見ると、中大兄はよほどのことがない限り、石川麻呂に兵を差し向けることはないだろうと思われた。

こうした考えに立つと、石川麻呂に叛心があつたと見なければならなかった。それは兎も角として、中大兄皇子もこの事件に依つて傷つかないわけではなかった。妃蘇我造媛が父の死を悲しむあまり、二人の皇女と生まれた許りの皇子を残して他界するという事件が追いかけて起こつたからである。

何と言つても、この石川麻呂の事件は嫌な事件であつた。が、嫌なことはこれ許りではなかった。それは事件が片付いてしまつたあとで、石川麻呂には叛心がなかつたことが判明したということで、密告者蘇我日向が大宰府に遷されたことである。このように発表されると、誰もそのことを信ずる以外仕方がなかつたが、何か割り切れぬものがあとに残つたのも事実である。

いずれにしても、事件の結果だけから見ると、大化の改新後残存していた僅かの旧勢力は、これに依つて全く新政府内から姿を消してしまつたわけで、殊に石川麻呂の死と日向の左遷に依つて、蘇我氏はついに、最後の細い根までも摘みとられてしまつた結果になつたのである。

石川麻呂の事件があつたあとになつて、巷にはもう一つの風説が流れた。それは政変以前に蘇我入鹿の手によつて、聖德太子の御子である山背大兄王が葬られた事件があつたが、それにも中大兄皇子が關係を持つていたといつたりが、噂であつた。この事件は、これまで誰にも簡単に考えられていた。入鹿は蘇我氏の血をひく古人大兄皇子を太子にするために、当時最も有力な太子の候補者であつた山背大兄王を除く必要があつたのであり、そして入鹿はそれを実行に移し、斑鳩に山背大兄王を襲う暴挙に出たのである。

ところが、この事件の裏に中大兄皇子が居て、入鹿をそのかさないまでも、それを未然に防ぐ措置はとらず、山背大兄王を見殺しにしてしまつたのだという風評が、事件後数年経つたいまになつて流れ出したのである。誰もこの噂をまともに受け取る者はいなかつたが、風評として、あちこちで囁かれた。中大兄皇子は入鹿の手で山背大兄王を葬り、その事件から生まれた蘇我氏一族への世の反感をうまく利用して、ついに蘇我氏を誅して、政変を敢行したといふのである。

どこかにうがち過ぎたところがあつたが、聞く者に、一応そういうこともないものでもないという思いを懐かせた。真相は誰にも判らなかつた。山背大兄王も、蘇我父子も、古人大兄皇子も、事件の渦中にあつた者は、いずれも非業

の最期を遂げて、今は亡^なかった。

こうした噂が流れるようになったのは、石川麻呂の事件の直後からで、中大兄皇子に対する世人の見方が、急に從來とは異なったものになったことを示していた。中大兄と鎌足の新政に対して反感を持つ者がまき散らした噂であったが、これが消えないで流れて行くだけの落ち着かないものを、時代は持っていたのである。

朝廷に白い雉が獻じられて来たのは、こうしたいろいろな風説や臆測^{おくそく}が流れている時で、石川麻呂の事件より丁度一年経^かっていた。

二月十五日に、白い雉が現れた祝賀の儀式が厳^{げん}かに行われた。春とは言え、二、三日前から気温は落ちて、身を切るような冷たい風が都大路を吹き抜けている日であった。

この日定刻の午前十時より一刻ほど前に、皇城の門外には兵たちと左右大臣以下百官が四列に並んでいた。左大臣の巨勢臣徳太と右大臣の伴連長徳の二人は、皇城内で天皇の側に侍^{まつ}って、白い雉の到着を迎えるものと許り思っていたが、この日はそれが許されなかった。二人は一緒に皇城内にはいるうとして、門のところで屈強な門衛に停められた。暫^{しばらく}くお待ち戴きましよう。さすがに言葉は鄭重^{ていじゆう}であったが、有無を言わさぬ強い響きを感じられた。二人とも

左右大臣を拝してから幾許^{いくばく}も経^かつていなかったのも、あるいはこういう儀式にはこのようなことがあるのかも知れないと思った。

定刻になると、天皇の侍臣である粟田臣飯虫^{あわののいひむし}等^らに守られて白い雉をのせた輿^{こし}がやって来た。どこから来たか判らなかつたが、長い隊列のずっと背後の方から、輿はかなりの時間をかけて進んで来た。巨勢大臣^{こせのあきひろ}は雉の輿を先導するものと許り思つて、輿が自分の前にやって来た時、足を踏み出そうとしたが、

「おあとにお付き下さるよう」

輿を守っている侍臣の一人に言われた。それで左右大臣の二人は輿に従つて、輿のあとから紫門^{むらさき}をはいらねばならなかつた。二人のあとには百官が続いた。百済の王子の豊璋^{ほうしょう}、高句麗から来ている侍医毛治^{もうじ}、新羅の侍学士^{じし}等の姿も見えた。

白い雉の輿は紫門と御殿の間に置かれてある広い中庭の中央まで行くと、そこに停まった。そこで飯虫等は一礼して輿から離れ、代わつて皇別氏族^{すくも}の三國公麻呂^{みくにのあさろ}、猪名公高^{いのなこうたか}見^み、三輪君魏徳^{みづのりけい}、紀臣乎麻呂岐太^{きのおろ}の四人が輿に近付いて、輿を御殿の前に運んだ。さっきの侍臣がやって来ると、

「どうぞ」

と、巨勢大臣と伴連大臣に言った。二人の大臣に初めて

仕事割り当てられたのである。二人は輿の前に進み出て、輿の前の方に手を掛けた。輿の後部にはすでに三国公麻呂等が控えていた。

輿は玉座の前に運ばれた。孝徳天皇は中大兄皇子を招いて、一緒に輿の内部を覗いた。天皇は白い雉を珍しそうに見ていたが、中大兄の眼の当て方は機械的で、やがてそこから離れると、玉座に向かって、恭しく頭を下げ、それから自分の席に戻った。

巨勢大臣は、前から決められてあった自分の役割に移った。祝賀の言葉を述べるのである。この祝賀の詞は、二日前に鎌足から文書として与えられたものであった。

——公卿百官に代わってお祝いの言葉を申し上げます。主上にはきよらかな徳を以て天下をしろしめされ、その瑞祥として、このほど白い雉が西の方に現れました。おめでたい限りでございます。主上には千代万代まで大八嶋をお治め戴いて、われら公卿百官、もろもろの百姓たちは、ただひとえに忠誠をつくして御恩徳に報ゆることを念願する許りであります。

巨勢大臣は祝詞を奏上し終わると、玉座に再拝して、自分の席に戻った。

続いて詔勅がくだった。——高徳の天子が世に出ると白い雉が現れると聞いている。周の成王の世と漢の明帝の時、

白い雉は現れた。自分にはその資格がないのに、白い雉が現れたのは、ひとえに自分を援けてくれる公卿、臣、連、伴造、国造等の忠誠によるものであると信ずる。この吉祥を受け、一層神祇を敬い、身を潔くして、天下の繁栄を冀うものである。

更に詔があつて、白い雉の出現を祝つて、大赦が行われ、年号は白雉と改められることになった。そして、白い雉を献じて来た穴戸の国司の草壁連醜経は褒賞として位が上げられ、禄も加えられた。

儀式は比較的短い時間で終わった。午後、公卿百官のために皇居内で祝賀の宴が開かれた。一人一人、中庭の一隅に置かれた雉の輿のところに行つて、それを覗き、頭を下げて、宴席に戻った。朝から烈しかった風は、この時刻になつてもいっこう衰えなかつたので、宴席に侍っている者は申し合わせたように鼻の頭を赤くし、唇を紫色にし、絶えず身を細かく震わせていた。

中一日置いて、白い雉は中庭に放され、中庭に面している部屋でそれを觀賞するための集まりが開かれた。この日は高官数人をのぞいては、あとは皇族許りであった。天皇は風邪気味で出席できず、中大兄皇子が一番の上座に坐っていた。

中大兄は中庭を歩いている白い雉に眼を遣^{つか}っていた。歩くだけで飛べなくなっている雉は、中大兄にはさして美しくは見えなかった。雉は時折、脚を停め、胸を反^そらすようにして、あたりを見廻している。そうしたところは落ち着きがなく、絶えず何ものかを警戒し、おどおどしている感じであった。

曾^{かつ}て山背大兄王もあのような恰好で歩いていたと思った。山背大兄王だけでなく、古人大兄皇子もあのように歩いていていたと思った。が、中大兄は自分が山背大兄と古人大兄のことを考えていたことに気付くと、急いで、そこから思いを他に移そうとした。二人のことを考えることは嫌^{いや}だつた。

その時、孝徳妃間人皇后が侍女を連れて廊下伝いに姿を現した。それに気付くと、一座には微かな波紋が伝わった。庭先きに降りていた者はそこで頭を下げ、縁側に立っていた者は、そこで身を屈めた。

「ほんとに白い雉ね」

間人皇后は言った。細い澄んだ声である。皇后は中大兄の妹で、二十五歳の中大兄と四つ違いであるから、二十一歳である。間人皇后はすぐ兄皇子の居ることに気付いた風で、廊下から座敷の中に足を運んで来た。

「わたしには今日のお招きがありませんでした」

間人皇后は低い声で言った。第三者には中大兄に言っているようには見えなかった。華奢な身体を持った美しい皇后はいつもこのような言い方をした。決して中大兄の方へは顔を向けず、あらぬ方に視線を投げていたので、第三者には、皇后がひとりごとでも言っているように見えた。

「余り美しい雉でもない」

「国の瑞祥と言われる珍しい雉でございましょう」

「そう、瑞祥かも知れない」

「あなたは何かもお信じになりませんか」

それから、

「御自分の力以外」

「自分の力を信じなくて、何ができる？」

間人皇后はやがて兄である中大兄の方へは一瞥もくれな
いで静かに席を立った。何人かの侍女たちが、それぞれ立
ち上がって、渦でも巻くように動き出し、器用に皇后のう
しろにつくと、そのままその一団は廊下を去って行った。

間人皇后の兄思いは有名であった。父舒明天皇を喪ったのは十二歳で、それ以来中大兄皇子を父代わりとして慕って
いて、何事も中大兄でなければ収まらなかつた。大化元年
に十六歳にして、当時五十歳の孝徳天皇の妃になったが、
これも兄皇子がそれを望むならということで皇女の決意す
るところとなつたと巷間に伝えられていた。

鎌足は、縁近いところに坐つて、白い雉の動きをゆつくりと眼で追っていた。瑞祥、瑞祥、——瑞祥が歩き廻っていると思つた。中大兄皇子のように、その雉の動きを、落ち着かないものにも、不安げなものにも感じていなかった。鎌足には白い雉は充分美しく見えた。

白い雉の出現を祝う儀式を企画したのは鎌足であつた。

そして、その儀式は、鎌足が望むように厳かに行われた。

一部に厳かすぎるといふような声もあったが、鎌足の考えでは、いかに厳かでも、厳かすぎるといふことはなかつた。

新しい時代は始まっているが、それはもう永遠に続くのだという考えを豪族たちにも、民たちにも植えつけねばならなかつた。どのようなあがいても、もう政変以前の古い時代には戻らないのだということを、老いにも若きにも、男にも女にも知らしめなければならなかつた。大赦が行われたことも、年号が改められたことも、ある程度の役割は果たしたと思う。また左右大臣たちを紫門の外に立たせたことも、雉の興を運ばせたこともよかつたと思う。中央の豪族たちや地方の氏族たちが政治に喙を入れたり、権力を振り廻したり、私庫を肥やしたりした時代はすでに終わってしまったのである。

鎌足は白い雉の動きを見守りながら、自分が何年かぶりで落ち着いて坐っているのを感じた。政変以後何年か慌し

く過して来たが、今日初めてこうして休息に似た時間を持つことができた気持だつた。まだ時代は決して安定してゐるとは言えず、新しく為さなければならぬことはたくさんあつたが、それにしても白い雉の出現に依つて、ひとつの区切りができ、いま自分はここにこうして坐っているのである。この数年間のうちに、すべての鬱陶しいものは取り払われている。若しここに古人大兄皇子の姿があつたとしたら、自分はこのように落ち着いて坐っていることはできぬであらう。何となく新政に邪魔だつた倉梯麻呂も居なければ、石川麻呂も居ないのである。

鎌足は中大兄皇子の方へ顔を向けた。自分がこの地上で、ただ一人の聡明なひととして選んだ若い皇子の身邊には、今やいかなる暗い影も見られない。除くべきものはすべて除き、取り払うべきものはすべて取り払ってしまったのである。中大兄皇子は、新しい政を布き、これまでになかつた国らしい国を造るために、この世に生まれて来られたのである。そして、それをお援けするために、自分は皇子より十年ほど早く、この世に生をうけたのである。

鎌足はふと、有間皇子と大海人皇子が連れ立って、白い雉の方に歩いて行くのを見た。有間皇子は現天皇と倉梯麻呂の女の小足媛との間に生まれた皇子で、中大兄皇子とは従兄弟の關係にあるが、十一歳の春を迎えた許りである。

まだ少年期へ一步踏み込んだ許りで、その顔の表情にも、その体にも稚さは脱けていない。併し、惻発さにかけては、同じ年頃の皇族の中では群を抜いているという噂が立っている。

大海人皇子は中大兄の弟で、十九歳であるが、体格は堂堂とし、もうどこから見ても、現政府首腦の一人としての貫禄を身につけている。中大兄皇子の一番の協力者であり、相談相手である。鎌足は今までは別にして、これからは、若し自分の身に変事があつたとしても、大海人皇子が居る限り、中大兄が執政において、道を大きく踏み違えるようなことはないだろうと思つた。中大兄皇子も二言目には弟の皇子の名を口にして事を謀っているが、大海人皇子の兄の皇子に対する尊敬と言うか、傾倒と言うか、そうしたものの並みひと通りのものではない。

鎌足は大海人皇子と有間皇子の二人が白い雉を追うように、雉のあとについて歩いているのを見ていたが、二人の皇子を一緒に並べて見た時、それまでは考えたこともなかった冷んやりした思いを持った。

——雉だからいいが、ほかのものだったら困る。

そう鎌足は思つた。将来、中大兄皇子が現天皇のあとを承けて即位するであろうことは、既定の事実と言つていいが、そういう日を迎えた時、皇太子の席を繞つての、大海

人皇子と有間皇子の關係はなかなか厄介な問題であろうと思われた。併し、問題はひとり大海人皇子の場合許りでない。現在まだ十一歳であるからいいようなものの、十年先きを考えると、有間皇子が中大兄皇子と並んで白い雉を追つたとしても、さして不思議はないではないか。

併し、そうした鎌足の遠い将来に対する取り越し苦労をよそに、青年と少年の、八歳違いの二人の従兄弟皇子は、鎌足の思いも寄らぬ会話を交わしていた。

「噂に聞く額田とはあの女か」

「そう」

「歌がうまいんだな」

「そう」

「あれだけ美しい女は見たことがない。間人皇后も美しいが、さっきあの女があとに随つて来るのを見ると、後の美しさなど問題でない」

「手もきれいだ」

「今頃からませたことを言つてはいかん」

大海人皇子が足で雉の尾を踏んだので、雉はけたたましい羽音を立てた。